

目次

金ヶ崎退陣	13
姉川合戦	26
信長包囲網	43
朝倉・浅井攻め	47
長島一向一揆	118
西国総司令官	144
播磨平定	159
鳥取城	187
備中高松城	199
山崎合戦	223
清須会議	245
賤ヶ岳	265
小牧・長久手	299
四国攻め	314
大和郡山城	328
家康上洛	334
九州攻め	354
秀長の死	368
参考文献	398

金ヶ崎退陣

「大変なことになったぞ」

青い顔をした秀吉が、金ヶ崎城へ駆け込んできた。

「どうしたのか」

いつもと違う兄の声に、弟の秀長が心配そうに叫んだ。

それは信長率いる織田軍が、朝倉方の金ヶ崎と手筒山城の二つの出城を攻め落とし、たちようど後のことだった。

「浅井長政殿がわれらを裏切り、われらは北から朝倉勢、南からは浅井勢に阻まれ、挟み撃ちになってしまったのだ」

せつかく信長が可愛い妹のお市を北近江の浅井長政に嫁がせたというのに、その長政が朝倉方に寝返ったのだ。

「それで上様はどうされるおつもりなのだ、兄者」

気性の激しい信長は、当然彼らに向かっていくだろうと、秀長は思う。

「上様は一刻も前に京都へ向かわれてしまったぞ」

「本当か、それは！」

秀長は驚く。

（大將が部下を棄てて一目散に逃げ出すとは…）

長年百姓をしていた秀長は、この時武士の世界に足を踏み入れたことが失敗だったと後悔した。

急を聞きつけて、秀吉の主な家臣たちが集まってきた。

事態を知っているのか、蜂須賀小六や前野将右衛門たちの顔がひきつっている。

唯一人平然としているのは、竹中半兵衛だけだ。

何か言いたそうな連中の顔を見回すと、秀吉は落ちつき払ったような調子の大声で、話し始めた。

『上様程の人を今ここでむざむざと失うことは惜しい』と徳川殿が軍議の席で進言されてのう。それで上様は京都へ発たれることを決心され、殿しんがりの役目をわしが引き受けたのじゃ」

さらりと秀吉は話すが、聞いている家臣らの顔は一瞬凍りついたようになった。

彼らの表情はまるで幽霊そのもののように映る。

「そう驚くことはないぞ。わしら下々の者たちは、こういう時にこそ命を張って働かぬと上様には認めてもらえぬ存在だ。普通に務めておったのでは、一生日が当たらぬからのう。ここはわしらの踏ん張りどころじゃ。一世一代の見せ場がやってきたのだ」

（兄者は皆を納得させようとしているが、何も兄者が殿役を務めずとも、織田家中には柴田や丹羽様といった大物がいらつしやるのに：）

秀長はこれまでの戦いで、一所懸命な兄の働きぶりを眺めてきた。

それはいつも綱渡りのようにきわどいものだった。

（上様に一人前だと認められ、「早く織田家を代表する柴田や丹羽様のようになりたい」と、いつも兄者は申ししていたからのう。わしはそんな焦る兄者の気持ちは痛い程わかるが、家来たちはそんな兄者の心を十分に納得してくれようか？）

秀長が恐る恐る振り返ると、小六や将右衛門たちは秀吉の思いを知ってか、真剣な眼差しで頷いている。

彼らはそんな秀吉の必死さを理解しているらしい。

それを知ると、秀長の緊張もようやく解けてきた。

「朝倉軍がここに現れるまで、まだ少々時があるようだ。今ここでそれがしが練り上げた作戦を申し上げましょう」

秀吉が頼み込んで軍師として奉っている竹中半兵衛は、普段は大人しいがこの時とばかり、毅然と襟を正して皆を見渡した。

「篝火で城内を煌々と照らし、軍旗を林立させる。これで敵は多くの伏兵が城内に潜んでいると錯覚するでしょう。まだ敵の来襲には一刻以上の時があります」

半兵衛の落ちついた姿は、皆に安心感を与えた。

その内、山続きの北東にある手筒山城から引き揚げてきた、柴田や丹羽といった織田の主力部隊が金ヶ崎城を通過する。

「殿の役目ご苦労。お互い無事に退き京都で再会しよう」

いつも下賤の者と秀吉を見下している髭づらの柴田の口元が、今日は珍しく笑っている。

「柴田様もご無事で：」

秀吉も頷き返す。

「猿、鉄砲が足らぬであろう。少し渡しておこう」

（兄者は猿々と見下され嫌がっているが、根は優しい人のようだ）

兄に口説き落とされて百姓から武士になった秀長は、半兵衛から武士の心構えを教
育されている。

この頃、生死の境で生きる武將の気持ちが少しわかるようになってきている。

信長の覚えが目出度い丹羽隊も鉄砲を分けてくれた。

最後に城門を通過したのは徳川家康隊だ。

「お役目ご苦労に存ず。ご無事で京都で再会しましょうぞ」

（いつもながら丁寧な人だ）

彼も惜しまずに大事な十挺の鉄砲を譲ってくれた。

全部隊が金ヶ崎城を去ってしまうと、これまでの喧騒と火の気がいっぺんに消えた
ようになり、城外は暗闇と静寂に包まれる。

こうなると今まで皆と一緒に戦っていた安心感が消え失せ、急に恐怖が顔を覗かせ
る。

「半兵衛殿が今後の作戦を申される。皆心して聞け」

彼らの怯えている胸中を見透しているかのように、秀吉が大声で叫んだ。

「上様が出発された後、われらの役目は約二刻ばかりこの地を支えるだけでよい。無
駄な戦さはするな。それからここにいる千名足らずの兵を三つに分けて、防御網を張

ることとする。鉄砲の一斉射撃を数回行い、敵が怯んだところで最前線の者は後方へ
退く。敵は第一陣を襲った時のように第二陣に攻め寄せてくるであろう。われらはこ
れに鉄砲で応酬する。最後は秀吉殿の指揮する第三陣と合流するのだ」

半兵衛はいつも通りの穏やかな調子で語る。

「殿の役目は秀長に任ず。もうよい時機だと思ったらさっと兵を引き揚げて、わしの
陣に追いついてこい！」

（いつも殿はわしの役目だ。兄者は味方の結束を引き締めるために、あえてわしに殿
の役目を押しつけたのだ。弟を犠牲にする姿を皆に示さねば兵たちはついてこぬから
な。兄の心境を思うと辛いものう）

秀長はわかったと頷き、兄の方を向く。秀吉はわざとらしく咳払いをした。

秀長は兄の信頼に応えようと思うが、緊張感からか足の震えが止まらない。

（ぜひ生き延びて京都へ戻らねば…）

やがて全身に闘志が漲ってくると、いつの間にか足の震えは止まっていた。

今か今かと敵を待つ心境は一刻が長く感じられるものだ。突然夥しい数の松明の群
れが城外に現れ、大半の織田軍が退いてしまっていることを知らない敵は、静まり
返っている城内の様子を窺っているらしい。

すぐに攻め込むのを躊躇しているようだったが、その内信長が逃げ出したと知ったらしく、どれくらいか兵が城内に残っているのか探ろうとし始めた。

城外から突然喧騒が湧き上がり、敵は次々と鉄砲や火矢を放ち出したので、敵の鉄砲玉と矢は最前線にいる秀長隊に集中した。

「しばらくの間だけ踏ん張るのだ。鉄砲の応酬は、敵を脅すだけでよい。無駄玉を控えよ」

激しい敵の攻撃はその後も続き、応酬する味方の兵は徐々に傷ついてゆく。

「そろそろ敵が城内に踏み込んでくるぞ。これより皆で山を駆け降りる。銃撃を加えてから、第二陣がいるところまで退け！」

もう秀長は殿の役目を十分に果たしたと判断した。

城外に出た秀長隊は闇に紛れて、一斉に全速力で山道を駆け降りる。

遠くで海鳴りの音が聞こえてきた。

味方の火縄銃の火種の薄明かりが見えるところまで走っていると、ほんと安堵のため息が漏れた。

「われらは秀長隊だ。城から脱出してきたぞ」

第二陣にいる兵たちは秀長の兵たちの無事を喜ぶが、敵は早くも城内を制圧したら

しく、縦列になった松明の群れがこちらを目掛けて山を下ってくる。

突然、山を揺るがすばかりの味方の鉄砲音が響くと、一瞬松明の群れの動きが止まった。

「もっと放ってやれ！」

何度も激しい鉄砲音が響くと、第二陣の味方は秀吉がいる第三陣の海岸線のところまで滑るように山の斜面を駆け降りる。

三陣と合流すると、彼らは迫ってくる松明の群れに向かって一斉に鉄砲を発射しながら後方へと駆けた。

必死に走っている内に喧騒と怒号は次第に遠ざかり、やがて敵が追ってこないことを確かめると、兵たちは棒のようになった足を引きずり、地面に倒れ込む。

疲労と緊張感から解放された秀長は、よろめきながら立ち上がった。味方の人数を数えると兵は半分しか集まっていなかった。

今まで隣りに居た仲間の姿が消えている。

信長が逃げた後を追いかけて走り続けた。

琵琶湖西岸を走り抜けるとやっと大原の里にたどり着いた。

安全圏に到達した安心感からか、秀吉隊はごろりと道端に横になると、そのまま死

んだように眠り続けた。

彼らは体力が回復し、故郷の岐阜へ戻るまでしばらく京都に留まる。

京都の織田の屋敷内で、秀吉と弟・秀長は何やら相談していた。

「この戦いで死んだ者たちの償いをしなければならぬ。お前は小六と前将と一緒に戦いで命を失った者たちの家へ行け。そしてお悔みを述べて金銭を渡してこい。わしは岐阜へ行き上様から金銭を貰ってくるからな。上様は金のことになると非常に渋い人なので、わしはしっかりと亡くなった者への償い分を取ってこなければならぬのである」

「わしが兄者の代わりに死傷者の家を訪れるのか？」

「死傷者のほとんどが小六や前将の手の者じゃ。やつらがお悔やみしているのを、お前は神妙な顔をしてただじっと座っているだけでよいのだ」

秀長が兄の代理として家臣の家を訪問するのはこれが初めてだ。

(彼らの死を両親に何と言えばよいのか、またどんな態度で臨めばよいのか)

あれこれ考えながら、秀長は小六や前将と連れ立って京都から木曾川流域に住む彼らの実家へとやってきた。

この辺は長良・木曾・揖斐川といった大河の支流が網の目のように入り組んでい

る。

滔々と流れている川へ小舟が何艘も浮かんでおり、船頭らしい男が立ち上がって網を飛ば入れている。

これらの人々は魚を取って市場へ持ってゆき、そこで得た金銭で生活しているようだ。

小六や前将が岸辺に姿を現すと、川で魚を取っていた男たちが、漁師の格好をしたまま、舟を岸につけてこちらの方へ集まってきた。

息子たちが朝倉攻めに加わっていることを承知しているので、彼らは自分たちの息子の安否を知りたいのだ。

不安気な様子で、三人の後をついてくる。

秀長をはじめ小六と前将が大きなつくりの庄屋の玄関を潜ると、彼らは三人に続いてぞろぞろと庄屋の家の中へ入った。

あらかじめここに集まるように指示していたのだ。

「さて集まって貰った一同に申し上げねばならぬ事がある」

彼らの視線が小六の口元に集まり、板間に腰を降ろしている彼らの顔にさっと緊張が走る。

「五郎太、一造、田平、庄大夫、市助らは勇敢に戦い、敵の鉄砲玉に当たって死んだ」

それを聞くと部屋の間気が急に凍りつき、無事だと信じていた両親たちはがっくりと肩を落とし、すすり泣きが号泣に変わる。

名前を言われていない両親からは思わず安堵のため息が漏れてくる。

「市松、五平、松助、与市らは身体に鉄砲玉を受けたが当たり所がよく命に別状はない」

親たちのひきつった顔には精気が戻り、「やれやれ助かったわ」と部屋に小声が広がる。

「松造、疾太、一松、寅、太助らは刀傷だけなので傷は浅い。すぐに動けるようになるぞ」

部屋の中に「よかった、よかった」と胸を撫で降ろす親がいる。

「それ以外の者は無事だ。上様は『よく働いてくれた。礼を申す』と満足気な様子だったぞ」

小六は皆の働きに感謝する。

「ここに上様から頂いた金銭が袋に詰め込まれている。一人ずつ受け取ってくれ。な

お勇敢に戦って亡くなった者の家族には二袋分預ってきた。これで新しい位牌を作って仏壇に祀ってやってくれ。彼らはわしらのために命を飛び出して懸命に戦ってくれたのだ」

それを聞くと我慢していた親たちの忍び泣きが一斉に大きくなり、傍らで聞いている親たちも思わずもらい泣きを始めた。

（兄者が殿を引き受けたばかりに、大切な多くの部下たちを失う破目になったのだ。

われらの存在を目立たせるためにはしかたがなかったが、死んでいった者たちには本当に済まぬことをした）

秀長がそう思っているうちに、小六や前将は家臣たち一人一人の親たちに頭を下げ、お悔やみを言う。

彼らの家族の生活が成り立つように骨を折ることを約束する。

秀長はただ、小六や前将たちが行う仲間への思いやりと配慮とを、傍らから黙って見ているだけだ。

生きていることを期待していたのに息子が亡くなったことを知った親たちは、小六や前将に後の生活を頼み、金銭の入った袋を二人から受け取った。

彼らは黙って座っている秀長に軽く叩頭して、静かに玄関から出てゆく。